

U研・ 発見!



新シリーズ

第25回 iSUC 札幌大会

変化すべき IT 担当者のあり方について 共に学び、会話する時間を より大切にしたい

嘉村 肇晃氏

全国 IBM ユーザー研究会連合会 第25回 iSUC 札幌大会 実行委員長
館野商事株式会社 営業本部 業務部リーダー兼システム担当

第25回の記念大会となるiSUC札幌大会が近づいてきた。今回は「挑」をテーマに、変化しつつあるIT環境と変化すべきIT担当者のあり方を、セッションと交流、モールを通して、さまざまな角度から考える場となりそうだ。実行委員長の嘉村肇晃氏に、札幌大会に賭ける思いを伺った。

「挑」に込めた強い思い

IS magazine (以下、IS) 最初にU研との出会いをお話してください。

嘉村 私は1997年の入社で、入社してすぐにシステム部門に配属され、AS/400の担当になりました。当時はシステムの右も左もわかりませんから、いろいろな人に教

えを請うて回り、その中で、北関東のAS/400ユーザーとも知り合いになりました。その人たちとはその後、「両毛AS/400研究会」という研究会を立ち上げましたが、メンバーの何人かがU研の会員であったので、誘われるまま参加したのがU研との出会いでした。

IS iSUCに初めて参加したのは何年ですか。

嘉村 1998年の第9回名古屋大会です。それから第

13回まで1ユーザーとして参加し、第14回の札幌大会（2003年）で実行委員になりました。そして、次の第15回も実行委員を継続し、第16回で事務局長を務めています。

IS 札幌大会に縁があるんですね。

嘉村 そう感じています。初めて実行委員となった第14回大会で、会場を札幌コンベンションセンターへ移したのですが、今年も同じ会場で開催します。札幌はiSUCの開催地としては最も多く、今回を入れると7回目になります。

IS 大会テーマの「挑 - i do mu -」には、どのような意味を込めているのですか。

嘉村 iSUCがスタートしてから25年、この間、ITを取

り巻く環境は大きく変化しました。たとえばクラウドやソーシャルは、これまでのITとはまったく異なる使い方を求めています。ITの考え方も、「作る」「所有する」から「利用する」へと大きく変化しました。こうした中で、ITに関わる私たち自身も変化することを求められています。そして、この変化はチャンスと言えるかと思います。次の成長ステージへの変化となるからで、それゆえに、チャンスには果敢に挑んでいく必要があります。大会テーマにはそうした思いを込めています。

IS 初日オープニングの基調講演が元セコムの木村昌平氏というのも、「挑」のテーマにぴったりですね。

嘉村 木村様は日本のCIOの草分け的な存在で、セコムの急速な事業拡大と成功をIT面から支え、数々の困難に挑んでこられた方です。「挑」というテーマと木村様

第25回 iSUC 札幌大会

<http://www.uken.or.jp/isuc/isuc25/>

挑 - i do mu -

会 期：2014年11月5日(水)～7日(金)
 会 場：札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)
 主 催：全国IBMユーザー研究会連合会
 支 援：日本アイ・ビー・エム株式会社
 協 力：北海道IBMユーザー研究会
 申込期間：2014年8月18日(月) 9時
 ～10月20日(月) 18時

参 加 費：IBMユーザー研究会の会員6万円、非会員6万5000円

会員特別割引：5万円(9月26日18時までの申込者)



大会構成

- セッション(参加型セミナー)、交流会(情報交換会)、iSUCモール(IT展示会)の3部構成
- セッション：総数は100以上。U研の各研究グループの発表、IBMセッション、
 教養セッション(北海道ゆかりの著名人が登場)、モールコラボセッション、
 エグゼクティブセッションなど多彩
- 基 調 講 演：木村昌平(益子昌平塾 塾長、セコム前相談役)。日本のCIOの草分け的存在！
- 交 流 会：ファーストタイマーズ・セッション、初日夜のiES(情報交換会)、2日目夜の交流会、
 最終日のクロージング・セッションなど。
- iSUCモール：IBM・ベンダーなどによる展示

の講演が決まったことで、大会の大きな流れができたと感じています。

iSUCに参加する醍醐味・価値

IS この25年の間には、インターネットやSNSが普及し、IT情報の取得という点でも大きな変化がありました。今、IT関係者が北海道まで出かけていき、iSUCに参加する価値は何だとお考えですか。

嘉村 やはり、人と人が互いに接し、そこで共に学ぶということの深さだろうと思います。今はネット経由であらゆることを知ることができますが、人が机を並べ、やり取りしながらテーマを深めていくのと比べると、理解の度合いがまったく違います。発見や気づきも違うでしょう。そうした人と直に交流し、共に学び合える点がiSUCに参加する醍醐味であり、大きな価値の1つです。

もう1つは、共通性と多様性で、参加する人たちにはITの仕事に従事しているという共通性があります。しかしよく見ると、ユーザー、パートナー、IBMの3者がいて、それぞれ立場が違います。また、パートナーもSIer、ISV、機器販売などの違いがあり、ユーザーも製造業、流通業、金融業などとさまざまです。つまりiSUCとは、共通性と多様性が混じり合うコミュニケーションの場であり、学びの場と言えます。こうした機会はめったにあるものではありません。これもiSUCの醍醐味で、大きな価値と言えます。今年は、参加者が学ぶ時間と参加者同士が会話する時間をより大切にしたいと考えています。

白熱セッションは今年も実施

IS セッションの企画で進めていることはありますか。

嘉村 セッション会場の部屋割りからすると、130セッション以上を設置できるのですが、数を追求するのではなく内容本位でいくことにしました。その結果、例年と同じ



120セッション程度になる見込みです。事例については、今年も目玉として力を入れています。

IS 大好評のiSUC白熱セッションは、今年も行う予定ですか。

嘉村 実施します。過去3回の白熱セッションで、スター講師のように有名になった方がおられますが、今回もスター講師の誕生を期待しています。白熱セッションがスター講師を生み出す器になるといいと思っています。インタラクティブなセッションとしてはこのほか、テーマをめぐって参加者が自由にディスカッションする「わいわいセッション」もあります。

IS 札幌大会ならではの趣向や企画はありますか。

嘉村 食べ物が旨い北海道ですから、参加された方においしいものを食べていただく企画を考えています。これについてはアドミ・チームが張り切っています。

IS 今回は25回という記念の大会です。何か特別な企画がありますか。

嘉村 参加者全員が少しずつ手を動かして大会期間中に何かを作り上げるという企画を検討しています。心に残る、記憶に残る企画です。まだ公表できる段階ではないので、乞うご期待!と申し上げておきます。📍